

マイ・ストーリー

柳有真

ユウ ユウジン

わたしはこんな人

好奇心がおうせいです。気に入ったり、興味をもったりしたものには、寝る時間を惜しんで取りくみます。でも、逆に興味がもてないものには、まったく時間を使いません。やらなければならないときには、しぶしぶやります。

固定したイメージでみられるのが嫌いです。だから、そのイメージをこわすようなことをわざとしたりします。

いつもは明るく元気なのですが、いったん何かがあって落ちこむと、どんどん悪いほうに考えてしまっ、とことん落ちこむときがあります。そうかと思えば、逆に能天気になることもあります。

おいたち

小さいころ

わたしは1981年に大阪²で生まれました。生まれてすぐのわたしを見て、父は「目の大きい子だなあ」と思ったそうです。

お人形遊びもしましたが、外で遊ぶほうが好きでした。幼稚園や小学校低学年のころは、ひざにすり傷が絶えなかったのを覚えています。

幼稚園に通っているころバドミントンと水泳を

始めました。休日には公園で、父とキャッチボールをしたり、バットを振ったりしていました。

小学生のころ

外で遊ぶことが好きな活発な子でした。

小学3年生か4年生のときに、母に連れられて、千里国際学園（以下、千里）に転入するための

面接試験を受けました。千里はインターナショナル

スクールも併設されていて、生徒の国籍や文化背

景はさまざまです。母は、わたしにそのような環

境で勉強させることで、視野の広い人間になって

ほしいと考えたのだと思います。でも、わたしは

千里のことをあまりよく知らず、興味もまったくな

かったので、「この学校に入りたいと強く思ってい

るのはだれですか」というような面接官の質問に、

「おかあさんかなあ」と答えてしまいました。これ

が原因かどうかわかりませんが、結局入れませ

んでした。

中学生のころ

小学校高学年のころ、3年ほどイギリスに行っ

ていた幼なじみの麻衣が帰国して、千里に入りに

ました。そして、麻衣から千里の楽しい様子を聞く

ようになりました。

当時、わたしが通うことになっていた学区内の

公立中学校はがらが悪かったのと、「今までかか

わったことのない人とかがかわれるのはいいなあ」と
おち せんり ちゅうとう ぶ じゅけん
と思って、千里の中等部を受験することにしまし
た。でも、ちち ほんたい
父は反対でした。そのとき、あね
姉が「うけるぐらいいいやん」と言ってくれたので、じゅけん
受験できました。そして、ごうかく
合格しました。なぜちち ほんたい
父が反対したのか理由はわかりません。このときに限らず、
わたしが何かしようとする、ちち さいしょかなら ほんたい
父は最初必ず反対します。反対する父を説得して、りょうかい
了解してもらうことがよくあります。その当時は、とうじ
どうしてそんなに反対するのだろうと、いやになることもありまし
たが、いま ほんたい
今は「反対されてめげるようではだめだ」とい
うことなのだろうと思えるようになりました。
ちゅうがくせい
中学生のときもスポーツはわたしにとって欠か
せないものでした。ねんせい
2年生のときに、しょうがくせい
小学生のころから通っていた市営プールのインストラクターの
しかく
資格をとりました。がっこう
学校では、トライアスロンクラブ
で活動していました。がっこう やす
学校を休むこともほとんど
げん き
ない元気いっぱいの中 学生でした。

こうこうせい かつ 高校生活

はんとしかん しょうきゅうし 半年間の小 休止

ちゅうがく ねんせい お
中学3年生の終わりごろから、どうきゅうせい なんにん
同級生の何人かとはな
し、話があわなくなってきました。むり
無理にあわせようとしたこともありましたが、けつごく
結局はだめでした。がくねん
1学年に2クラスしかないしょうにんずう
少数のなかで、はなし
話があわないどうきゅうせい
同級生がいるというのは大きなダメージ
です。
おな
同じころ、かてい がっこう かんが ちが
家庭と学校の考えかたに違いがあることにとまどうようになりました。がっこう
学校ではじしゅ
自主性がせい おも
重んじられます。しかし、いえ
家では、「こうしな

さい、ああしなさい」と、おや くち
親が口だしすることが多い
いのです。「ほっといて」と言っても、はは かんしやう
母は干渉します。また、としうえ ひと いけん
年上の人の意見には従うようにと家
ではおし
教えられてきました。しかし、がっこう
学校では自分
の意見（いけん）を言うことが必要だと教えられ、じっさい
実際、相
て ねんれい かんけい
手の年齢（ねんれい）に関係なく、みんな自分の意見（いけん）を主張
（しゅちやう）
します。わたしは、としうえ ひと たい らんぼう くち
年上の人に対してらんぼう
乱暴な口を
きいてはいけないと思いますが、なっとく
納得できないこ
とに対しては、たい じぶん いけん い
自分の意見（いけん）を言（い）っていいと思（おも）うの
で、いえ じぶん いけん い
家でも自分の意見（いけん）を言（い）ってしまいます。わた
しの言（い）うこと（こと）にみみ
みみ（み）を（を）かたむけようともせず、「いい
からはや
早く（はや）しなさい」と言（い）われるとはんぱつ
反発（はんぱつ）してしまいま
す。いえ お
家でお（お）押（お）さえつけられてい（い）るとかん
感じる（かん）よ（よ）うにな
りました。そして、そのうち、いえ いや
家が嫌（いや）になり、がっこう
学校（がっこう）
が嫌（いや）になり、なに
何もかもが嫌（いや）になりました。

こうい（い）ったこと（こと）がかんけい
関係（かんけい）して（して）いた（いた）のかどう（どう）か今（いま）
もはつきり（つきり）とわ（わ）から（ら）ない（ない）の（の）です（です）。ちゅうがく ねんせい お
中（ちゅう）学（がく）3（さん）年（ねん）生（せい）の終（お）
わり（わり）ごろ（ごろ）から、とつぜんなみだ
突然（とつぜん）涙（なみだ）があ（あ）ふ（ふ）れ（れ）だ（だ）して（して）止（と）ま（ま）ら（ら）なく
なる（なる）こと（こと）がときどき（ときどき）あ（あ）り（り）ま（ま）し（し）た（た）。いろいろ（いろいろ）な（な）思（おも）い（い）や
かんじ（かんじ）ょう（じょう） い
感（かん）情（じょう）が（が）入（い）り（り）ま（ま）じ（じ）っ（つ）て（て）、じぶん
自分（じぶん）でも（でも）せつめい
説（せつ）明（めい）が（が）で（で）き（き）な（な）い（い）よ
う（う）な（な）こんらん
混（こん）乱（らん）し（し）た（た）状（じょう）態（たい）に（に）な（な）る（る）の（の）です（です）。せいり
整（せい）理（り）で（で）き（き）な（な）い（い）感（かん）
情（じょう）が（が）ふ（ふ）く（く）ら（ら）ん（ん）で（で）い（い）く（く）の（の）です（です）。そう（そう）い（い）う（う）とき（とき）は（は）、じゅぎやう
授（じゅ）業（ぎやう）
で（で）い（い）出（で）る（る）こ（こ）と（と）も（も）で（で）き（き）ず（ず）、また（また）とも
友（とも）だ（だ）ち（ち）に（に）しんぱい
心（しん）配（ぱい）さ（さ）れ（れ）た（た）り（り）理（り）
ゆう
由（ゆう）を（を）き（き）か（か）れ（れ）た（た）り（り）す（す）の（の）も（も）い（い）や（や）な（な）の（の）で（で）、スクールカ
ウンセラー（ウンセラー）の（の）せんせい
先（せん）生（せい）の（の）ぶ（ぶ）い（い）や（や） い
部（ぶ）屋（や）に（に）行（い）っ（つ）て（て）い（い）ま（ま）し（し）た（た）。せんせい
先（せん）生（せい）
は（は）、りゆう
理（り）由（ゆう）を（を）き（き）く（く）こ（こ）と（と）も（も）な（な）く（く）、ただ（ただ）、「はい、ティッ
シュ」とか、「はい、お茶」と言（い）う（う）だ（だ）け（け）で（で）、わたし
が（が）な
泣（な）く（く）の（の）を（を）そ（そ）と（と）み（み）ま（ま）ち（ち）
見（み）守（まも）っ（つ）て（て）く（く）れ（れ）ま（ま）し（し）た（た）。しかし、こん
混（こん）
らん
乱（らん）し（し）た（た）状（じょう）態（たい）は（は）つづ
つづ（つづ）き（き）し（し）、こうこう ねんせい
高（こう）校（こう）1（いち）年（ねん）生（せい）の（の）10（じゅう）月（げつ）、きゅうがくとど
休（きゅう）学（がく）届（とど）
け（け）を（を）し（し）ま（ま）し（し）た（た）。

きゅうがくちゅう
休（きゅう）学（がく）中（ちゅう）は（は）、せんせい
カ（カ）ウンセラー（ウンセラー）の（の）先（せん）生（せい）に（に）さうだん
相（さう）談（だん）し（し）たり（り）、

病院でカウンセリングを受けたり、アルバイトをしたり、トレーニングジムに通ったり、ときには母と2人でバドミントンをしたりしていました。休学することになったとき、母は泣いていたと思います。

休学中は、けんかもたまにはしましたが、それまでと比べると、母はわたしを放っておいてくれました。わたしも自分のやりたいことだけをやっていました。とくに体を動かして汗をかくのがとても心地よかったです。それから、友だちのあやとめぐの2人と続けていた手紙のやりとりが心の支えになりました。

結局、半年間休学しました。この半年間、結果をだすようなことをとくにしたわけではありませんが、わたしにとって大事な休みの期間だったと思っています。

充実した高校生活

半年間の休学のあと、1つ下の学年に復学しました。最初は少しとまどいましたが、学校には以前からの仲のいい友だちもいたし、わたし自身クラスの雰囲気盛り上げる努力をしたこともあって、思ったより元すなりと学校生活に戻ることができました。それからは、生徒会やクラブ活動で忙しく楽しい毎日過ごしています。

高校2年生の6月から1年間、生徒会で書記をしていました。生徒会の活動は、おもに文化祭やスポーツフェスティバルの企画運営です。生徒会での活動で友だちを増やすことができました。また、生徒会の活動をつうじて多くのことを学びました。協力することの大切さや自分の考えをはっきり言うことの大切さ、また妥協もときには必要で

あること、統率することのむずかしさなどを学びました。そして、先生と仲よくなれたこと、何かをやりとげたときの喜びを知ることができたのも大きな収穫でした。

カウンセラーの先生の部屋にはその後もときどき行っています。今は何でも話せて、自分の弱い部分も見せることができます。とくに家で親とけんかしたことをよく話します。友だちに話すと、「それはいややなあ」というわたしの立場にたった反応しか戻ってこないのですが、先生だと、わたしの言い分を聞いてくれたうえで、親の考えていることも教えてくれます。先生の意見はなぜか素直にきけるのです。

大好きなこと：スポーツ

千里のクラブ活動は、シーズン制になっていて、シーズンによって活動内容が変わります。わたしは、高校に入ってからずっとクラブ活動を続けてきました。4月から6月はバドミントン、9月から11月まではバレーボール、そして11月から1月まではサッカーをしていました。高校生になるまで、水泳とバドミントンとトリアスロンしかやったことがありませんでしたが、ほかのスポーツにふれてみて、いっそうスポーツが好きになりました。

APAC(Asia Pacific Activities Conference：韓国、中国、フィリピン、日本のインターナショナルスクール6校から構成されているスポーツリーグ)に、バレーボールとサッカーのメンバーとして5回出場し、優勝と上位入賞を果たしました。2年生のときに出場したAPACでは、バレーボールとサッカーで、オールスターメンバー賞をもらいまし

た。これは本当にうれしい賞でした。

3年生のとき、校内の年間スポーツ賞で、最優秀スポーツ選手賞を受賞しました。このときの賞状とトロフィーは宝物です。

今年は受験生なので、クラブに入れないのが残念です。勉強も大切ですが、運動もストレス発散に欠かせません。だから、今年の夏も、中学2年生から続けている市営プールのインストラクターをしました。それからバレーボールの授業も楽しみです。体を動かすのがうれしくて、思わずはしゃいでしまいます。

スポーツは、喜びや悲しみ、緊張感、自分の力不足、チームワークや友だちの大切さ、人のことを思いやる心など、多くのことを教えてくれます。勉強も同じですが、自分が努力すれば、きちんと結果がでるものです。

2つの文化

千里に通う生徒の出身と文化背景はさまざまです。国籍は何十カ国にもなります。千里に入るまで、自分が韓国人であることについてあまり考えたことはありませんでしたが、いろいろな文化背景をもつ人たちのなかにおいて、自分が韓国人であることを心のなかで主張していくようになりました。でも、わたしは「国籍」というものには疑問を感じます。たとえば、在日韓国人3世³のように国籍と生まれた国が違う場合、わたしは母が韓国生まれなので特別だと思いますが、ほとんどの3世は韓国に行ったこともなければ、韓国語を話すこともできません。いくら、国籍は韓国だと言われても、実感はもてないと思います。人を「～

国の人」ではなくて、「～の文化で育った人」としてみるほうが自然だと思います。

わたしは、幼稚園、小学校と公立の地元の学校に通っていたので、家の外の世界は「日本」でした。家では、おもに韓国語を話し、韓国文化、韓国の考えかたで育てられたので、家の中は「韓国」でした。わたしのなかには、2つの異なる文化が自然に共存しています。

将来について

中学校に入ると、新入生は全員、カウンセラーの先生の面接をうけます。そのとき初めてカウンセラーという職業のことを知りました。それから、先生へのあこがれもあって、カウンセラーになりたいと思うようになりました。

高校3年生の秋、受験生だからという理由でAPACに出場できないことが悔しくて泣いてしまいました。そのころ、カウンセラーの先生から、アメリカのプロゴルファー、タイガー・ウッズにはスポーツカウンセラーがついているという話を聞きました。わたしは、学校のクラブのことでさえこんなに悔しくて泣いたり、落ちこんだりすることがあるのだから、プロのスポーツ選手であれば、その悩みはどれほどだろうかと考えました。競技によって、悩みは違うだろうと思います。わたしは、千里に入ってから何種類ものスポーツをしたり、スランプに苦しんだりしました。その経験をいかしたい、大好きなスポーツを生涯続けていきたいと考えているうちに、「スポーツカウンセラー」になるという目標が定まってきました。

まず日本の大学で臨床心理学を勉強して、そのあとスポーツカウンセリングの分野で進んでいるアメリカの大学院に留学するのが夢です。勉強は、好きか嫌いかと聞かれたら、嫌いだと答えると思います。でも、「輝かしい未来」のためにがんばります。

家族・友だち

わたしの家族

父、母、姉2人、わたしの5人家族です。わたしのスポーツ好きは、家族の影響です。父はずっと野球チームに所属しています。母は、高校、大学をとおして中距離の陸上選手で、韓国の国体にも出場したことがあるほどで、日本に来てからは、ずっとバドミントンをしています。いちばん上の姉は、高校も大学もバドミンソンの推薦⁴で入りました。

わたしの家では、怒るのは母です。父が怒る前に母が怒ります。父は母が怒っているのを見ているので、あまり怒りません。でも、怒るととてもこわいです。家族のなかに、きちんと怒る人がいることは必要だと思ひますが、わたしの家は厳しすぎるし、子どもたちにかまひすぎるところがあります。たとえば、いちばん上の姉は20歳をすぎているのに、遅く帰ってくると父は小言を言ひます。家であまり厳しくしていたら、1人暮らしをしたときにどうなるのだろうかと思ひます。

それでも最近、は、厳しすぎると感じるものの、わたしが今あるのは両親がいてくれるからだと思ひようになりました。だから、両親に感謝していま

す。わたしにとって家族はあたたかな存在です。

わたしの友だち

友だちには、嫌だと感じたり、その友だちがよくないことをしていると思ったりしたときは、自分の思っていることをその場で言うようにしていません。はっきりものを言うので、泣きながらけんかをするこもありますが、そのほうがさっぱりしていると思ひます。本人のいないところで悪口を言うのは嫌ひです。友だちといつもベタベタしているひつようはないと思ひます。その分、会ったときはできるだけ思ひっきり楽しんで、嫌なことを口にしたかおり顔をだしたりしないようにしていません。

友だちといると安心します。毎日会っていても、久しぶりに会っても、家族とは違ひあたたかさややさしさがあって心が落ちつくのです。

わたしのまち

わたしが住む東大阪市⁵は、大阪の繁華街から電車で15分くらいのところにある昔からの住宅地です。中学校から、大阪の北部、箕面市⁶千里にある千里国際学園に通っているひので、あまり地元と思ひいいれはありません。むしろ、学校周辺の公園や、よく遊びに行く難波のほうがなじみがあります。

南港は、よく行くわけではありませんが、好きな場所です。きれいな海とは言えませんが、海を見ていると、水平線に感動したり、無の気分になれたりして、いつまでも海をながめていたくなります。